



Title	精神障害者当事者組織の生成と展開の記録：すみれ会小誌（1970—1994：札幌）
Author(s)	河野，仁志
Citation	北海道大學教育學部紀要，65，245-269
Issue Date	1995-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29455
Type	departmental bulletin paper
File Information	65_P245-269.pdf



精神障害者当事者組織の生成と展開の記録

— すみれ会小誌 (1970-1994: 札幌) —

河 野 仁 志

A simple record of the organization for,
of and by mentally disabled persons.
— On the formation and development
of the Sumire Association in Sapporo 1970 to 1994 —

Hitoshi KAWANO

序 問題関心の所在と本稿の課題

これまで精神障害者^(#1)は主に精神医療や社会福祉の側から治療・リハビリテーションないし援助の被対象という枠内から取り上げられ、社会学においては、レイベリング論、スティグマ論、精神病院のエスノグラフィー、社会的ネットワーク調査、社会的病因論などの考究がなされてきている⁽¹⁾⁻⁽⁹⁾。しかし、そこに共通して欠けていることは、日本国民という主体として現実に生き抜いているという視角からの精神障害者の実像把握に至る学的営為である。

解明すべきは疾病史でも病人史⁽¹⁰⁾でもなく、「二重の不幸」^(#2)という状況下におかれながらも、精神障害者がふつうの人間的生活を求め、精神病院でも地域社会でも孜孜営々と生存・生活し、仲間をつくり、そして一般社会との人間的な関係を構築し、努力・工夫しているという実際の様態とその歴史である。

いまなお、彼らに関わる事実・記録の収集・整理は極度に少ない。近時、精神障害者の生活実態と福祉ニーズに関わる重要な調査研究が開始されている⁽¹¹⁾⁻⁽¹³⁾が、精神障害者の全人間的かつ現実的なありのままの姿を得る水準に達しているとはいいい難い。また、当事者や家族による記録や発言がある⁽¹⁴⁾⁻⁽²²⁾が、その数は貴重かつ希少である。その他、社会参加に関する報告やマス・メディアによる報道などが1981年の国際障害者年の前後から増大しつつあるが、総体的にみるなら、牢固たる無知と偏見・差別を打破し得るまでの力としては今なお、精神障害者の実像解明の努力が微小であることは否定できない。

以上のことを踏まえて、本稿の課題は、すでに20数年間にわたり札幌市を主たる場として活動している精神障害者当事者組織すみれ会を対象として、生成と展開の過程を整理し記述することにある。その際、初めから設定された恣意的な調査項目に従って分析を進めるということはせず、すみれ会自身が20年にわたり毎月発行し続けてきている会報⁽²³⁾を原資料として、そこに示されている事実＝彼らの績年の行為と思想を虚心に受け止め、会の歩みが自ずから語ることを書き留めるという姿勢をとり、またこれまであまりにも無視されてきたその構成員たちの言い分や生き方に正しく目を向けることに徹したい。

こうした意味で本稿は素朴なアプローチによる、精神障害者、とりわけその当事者組織の歴史的記録のひとつの試みである。

I 精神障害者の処遇と当事者組織

現代日本の精神障害者処遇の経過は、私宅監置中心の時期(明治～1950)、精神病院での入院治療中心の時期(～1987)、社会復帰と人権尊重が唱われ出した最近(～現在)の3期に大きく分けられることができる⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾。

これを精神障害者の側からみるなら、国家の社会防衛的観点による隔離下の時期、精神病院内収容を前提とした医療下の時期、そして、国民としての基本的権利の実現を目指し出した最近としてみることができる。

こうした変動の底流に精神医療・福祉関係者などの並々ならない努力と運動があった。とりわけ、ライシャワー事件を契機にした精神衛生法改訂に際し結成された世界初の精神障害者の家族会の全国組織と各地の家族会(1965～)が、精神障害者福祉法制定などの運動に一貫して取り組んできているという史的事実がある⁽²⁴⁾⁽²⁶⁾。

そして、「草の根のように何十年も地域で病院で当事者活動を続けてきた」⁽²⁷⁾精神障害者たちがいたのであった^(#3)。戦後民主主義の色濃い1950年代における精神病院内の患者自治会活動⁽²⁸⁾などを経て、1960～1970年代に様々な形態の患者組織が各地に作られ、1980年代を通じて、地域的な不均等がありながらも患者組織間の連絡が進展し都道府県レベルでの組織形成へとすすみ、1993年、日本初の精神障害者当事者団体の全国組織、全国精神障害者団体連合会(全精連)が結成されている。神奈川県など6つの都道府県レベルの連合会と18の患者会が正会員であり、交流し、機関紙を発行し、国に対する要望書を提出するなど、「ひとりぼっちをなくす」ことを原点にした「精神障害者の人権の確立をめざして自ら立ち上がった当事者の全国組織」⁽²⁹⁾である。

北海道から、北海道精神障害者回復者クラブ連合会(27単会、803名、道回連)⁽³⁰⁾が加わっており、横式多美子会長は全精連の副代表に就任している。全精連結成の推進役の1組織であった道回連は、1983年に都道府県レベルでは全国2番目の当事者組織として結成され、その中心的存在が、全国的にみても早い時期⁽²⁴⁾の1970年に結成されているすみれ会である。

II すみれ会の現在 ― 組織と運営

はじめに、紹介も兼ねて、すみれ会の現在の概要を以下に示す。

1 会 則

現在、すみれ会は札幌市中央区にプレハブの事務所を構え、会員約325名を擁し活動を展開している。活動の基本を定めた会則は、1981年に初めて制定され、1987年の全面的改訂を経て、1989年に一部改訂され現在に至っている。

会の目的は、「精神障害者並びに精神障害回復者が社会的に自立し、人格をもった人間として尊重され、人並の幸せな生活が送れるようになるために寄与すること」(第1条)である。会員の資格は、「北海道に在住する精神病を患ったことのある者」(第4条)であり、役員は会長1名、副会長2名、幹事若干名、会計1名、顧問5名である。

運営費は、会費(年額3000円)・賛助会費・事業収入・助成金・寄付金その他であり、平成4年度の決算によると収入は1094万6851円である。支出では、会の運営に260万1860円、作業所運営に834万4991円使われている(No.237, 1993. 4. (前者は通算発行号数, 後者は発行年月を表す。以下同様))。

2 事業

事業目的は、「精神病になったことによりおこる障害者としてのハンディキャップを克服して、地域に溶け込んで生活できるように、精神障害者の能力を高め社会復帰への能力を養う」（平成5年度事業計画書）（No.237, 1993. 4.）ことであり、事業内容は、すみれ共同作業所、行政への働きかけ、啓発、他団体との交流、日常的活動、会議、その他に区分される。

- ① すみれ共同作業所は、「精神障害者回復者が作業訓練や生活訓練などの共同作業を毎週5日行うことを通じて社会適応能力を拡大することにつとめ社会復帰を目指」すことを目的としている（共同作業所のしおり）。会員の通所者をその対象としており、平成4年度には、237日の開所日に延べ7795人、1日平均約33人が利用している。

作業では、ダンボール加工・箱折・腐葉土の袋詰め・機関誌の印刷発送・除雪作業などが、生活訓練では調理実習・家事一般実習などが行われている。その他に、革工芸や洋裁などがありバザー出品用製品も作っている。

指導員は会員であり、全国的にも数少ない精神障害者自身による運営がなされている。「のん気、根気、元気」をモットーとし、参加は当事者決定を重視しているという特徴を持つ。参加者には少額の作業手当が支給されている。

共同作業所の収入総額は、834万4991円、その内、作業収入92万0078円・バザーなどの事業収入が48万0889円、札幌市からの補助金が572万円・共同募金会配分金49万円・寄付金61万2879円である（平成4年度決算書）。

なお、1994年3月、すみれ第2共同作業所（30坪）を完成、始動している。

- ② 行政への働きかけの対象は、国・道・札幌市と重層的であり、要求・要望の性質により、会独自で行うもの、加盟先の障害者団体（障道協——障全協）を通じて行うもの、また精神障害者自身の組織である道回連——全精連を通じて行うものなどがあり、行動は積極的である。

要求・要望は、精神障害者福祉法制定、精神保健法の改善、精神障害者の暮らしやすさ、の3つが中心である。共同作業所への札幌市からの補助金などはその結実である。

- ③ 啓発は、家族会との連携、新聞や雑誌への原稿書き、講演会などの出席・発言、そして学習会開催が主である。

平成4年度実績では、北海道家族会連合会（北家連）主催のシンポジウムと保健婦担当者会議にそれぞれ当事者の立場からシンポジストとして発言し、美唄や倶知安などの保健所を訪問している。学術講演会や精神保健全国大会にも出席・発言し、見聞をひろめ、京都・大阪で講演している。そして、翌平成5年に迫った精神保健法見直しに向けた学習会を開催している。

さらに、同年、12月9日に横式多美子氏が、「自力更生して社会活動に参加し顕著な功績をあげられました」と総理大臣賞を受け^(#4)、新聞やテレビを通じ全国に伝えられている。

- ④ 他団体との交流は、2つに区分される。

第1は、加入団体での会議等への参加であり、公的なものでは札幌市社会福祉協議会と北海道精神保健協会、障害者団体では障道協、精神障害者の団体では道回連である。その他に北海道小規模作業所連絡会と札幌市精神障害者共同作業所連絡会での連携、運動会やソフトボール大会への参加などがある。

第2は、他所見学と見学来訪の受け入れである。会を訪れる人たちは全国的な範囲にわたっ

ており、平成4年度には、石川県精神保健センター所長と茨城県水海道保健所相談員が訪れ、道内からも精神医療関係者や家族・当事者が間断なく訪れている。また、精神医学や精神科リハビリテーションの勉強のため訪れる学生達も少なくない。みんな大歓迎されている。

⑤ 日常的活動は、主として会員を対象とした活動であり、会の原点であり、現在も大切にされている。次の8項目である。

【すみれ会便りの発行】：編集・ワープロ打ち・印刷・製本を自分達で行い約770部を作り、毎月、会員と関係者、支援者、医療機関に郵送しており、範囲は全国に及んでいる。

【生活相談】：以前から関わりの深い全国生活と権利を守る会北海道本部（道生連）の事務局長が生活保護相談などについて月1回設定された日に相談を引き受けている。

【年金相談】：主として障害年金などの種類・内容と手続きに関して、会の中の詳しい人たちが引き受けている。

【入院中の会員の見舞いや電話】：再入院した人や入院中に会員となった人たちとの面会や電話でのおしゃべりなど、入院体験を共有するもの同士の触れ合いである。

【いこいの場】：会の事務所にきて、ひたすら横になっていようが、作業をしなかるうが、あるいはおしゃべりをしていようが、本人の意志を尊重し、文字どおり憩うことがこの会では大切にされている。また、月1回は普段より遅い時間まで事務所が開かれる。

【サークル活動】：ソフトボールや水泳などのスポーツ活動、会員のギターにあわせての合唱、ボランティア講師に習う歴史や哲学など、入院生活で奪われることの多かった活動である。

【レクリエーション】：日常的にはカラオケやマージャンなどが行われ、春は花見、夏は海水浴、秋は1泊旅行、冬は忘年会と、催しがもたれている。

【例会】：24年来、延々と続いており、毎月1回土曜日の夕方集い、皆で準備した鍋をつつきながら近況を話し合い、酔い、唄い、心の洗濯をしている。重要な計画や活動報告と討論なども行われる。

⑥ 会議には、毎月の役員会と幹事会があり、運営上の協議と決定が行われる。会員以外の人には傍聴はできるが口は出せない。年に1度、総会が開かれ、1年間の総括がなされ、今後の方針が決定される。和気相々とした雰囲気の中、当事者決定の論理が貫徹される。

⑦ その他では、その時々的重要な事業が取り組まれる。平成4年度では、横式氏が総理大臣賞受賞のため上京。同氏は、「受賞は、全道の精神障害者みんなの喜びだと思う」⁽³¹⁾、「10年前、私たちはキチガイといわれ障害者の仲間にも入れてもらえなかった。いまは運動のなかでも障害者として認められ、やっと人間になったという気がします」⁽³²⁾と語っている。

また、同年度にはすみれ第2共同作業所の建設についての企画と討議が行われている。

3 小 括

こうして、すみれ会は自らの努力により、札幌の地で、精神の病気と障害を抱えながら20数年間にわたり、互いに励ましあい、そして助けあい、泣いたり笑ったりしながら仲間をつくりあげ、地域社会のどまん中で生きるために、小さいながら強固な組織を形成し活動してきた。

同時に、精神医療や社会福祉などの行政や社会全体に対して一貫した働きかけをしてきた運動の主体として、協力者の支援も積極的に取入れながら、自らを立ち表してきた。

このこと自体がひとつのまごうことのない彼らの存在証明であり、わが国社会の歴史上での業績である。しかし、彼らの前には課題が山積しており、それをこの社会のなかでいまでも懸命に日々

明るく自信をもってしなやかに取り組んでいる。以下に、ここに至るまでの軌跡を記録する。

III 生成期（1970—1983）

会発足から組織的自立までの期間であり、安達らは4期に分けている⁽³³⁾⁽³⁴⁾。即ち、発足期、会のあり方に悩んだ時期、自立への足がための時期、そして独立期、である。

1 発足の時期（1970—1973）

1965年に改訂された精神衛生法により、1968年、北海道精神衛生センター（以下、センター）が札幌市に開設され、「翌1969年9月から、週2回のデイケアを社会復帰学級と名づけて、北海道で最初の病院外社会復帰事業のパイロット的実践研究の場およびセンター職員を含む専門研修対象者の訓練の場として始め」ている⁽³⁵⁾。対象者は在宅で無職の慢性分裂病者10名ほどであった。6カ月で卒業の予定だったが、「多少心が近くなるぐらいのところまでしかいかなかったの」で⁽³³⁾、期間を1年に延長し、なんとか就労する人や家庭内適応などの半自立の人も出て卒業となった。

そのなかの4人が最初のメンバーとなり、1970年10月、集まりがもたれた。発足の要因は、「①患者側からのニーズとして、社会に出てからも精神的支えの場が欲しい、②センター職員側での学級終了者に対するアフターケアとしての予後の追求と再発の予防をはかりたい、③同じく職員側から、リハビリテーションの1段階として定着させること」であった⁽³³⁾。

第1回の集まりは、センター職員の指導のもとに、「センターの和室に……集まり……たった4人だったけど、皆でつくったオイナリサンのおいしかったこと、将来について胸はずませて語った」というものであった⁽³⁶⁾。その後も、月1回、日曜日に、お昼をつくって食べたり、レクリエーションや見学をしたり、仕事や病気などの話をしていた。1971年5月、新しいメンバーが加わったので、「すみれの花は1本ではめだたなく忘れ去られるけど、たくさんかたまて咲くと美しいし、めだつ」（No.192, 1989. 7.）というメンバーの声が出て「すみれ会」と名前がつけられた⁽³⁷⁾。

この時期は、「センターのいうがまま」（No.38, 1976. 8.）であり、また、「自分たちでは何もできませんでした。センターの先生たちのおかげで運営して」（No.192, 1989. 7.）いたのであった。月に1度の幹事会で次回の例会を考え、案内のハガキをだしていたが、病状が影響してハガキが戻ったりもし、また、しだいに参加者がへり、時には「先生ひとりに回復者ひとり」（同上）という状態になっていった。会員数は20人くらいにふえていたが、参加者がへりだし、3年たとうとしていた頃、危機的状況にいたるが、話し合い、「やめてしまおうか、続けようかだいぶ迷いましたが、ひとりでも来るということは、必要だから来るのだ、ということで続けることになった」（同上）。さらに、「便り」（会報）をだすことと係も決められた。

「学級を卒業し社会復帰をしても同じ病気をもった仲間と話をすることのできるという会員にとっての貴重な場で」⁽³⁴⁾あり、その確認を、会員の話し合いの中で、この時期にしたこと、便りをだすことによって会を前向きに建設する努力が開始されたこと、その根底に精神障害者が地域社会で生きていくうえの困難を取り除くためにこの会が必要なのだという認識の一致をみたのである。

2 会のあり方に悩んだ時期（－1980）

〈運営と組織の形成初期〉

1973年7月5日、すみれ会便りの第1号（手書きで湿性の青刷、B4版1枚）が発行、会員に郵送された。その最初に、「自分達で会をより自主的に楽しい会にするために……発行」とあり、年間500円の会費（主として切手代）、幹事5名の名が記されている。

7月の例会（15日の日曜日、石狩浜でのジンギスカンとレクリエーション）の案内があり、会員2人の近況報告が掲載されている。1人は、「元気に……勤め……パンを焼き……売っている……うでは火傷がいっぱい……待遇が良いので満足」と仕事のことを書き、もう1人は、学校生活や就職と能力の悩みと辛いアルバイトについて書き、「すみれ会の常会は私の精神生活の後立て」とある。

翌月の第2号には、7月例会の報告が載り、良い天気の中元気に食べたり話し合ったりしたこと、参加者が4名と少なかったこと、この次はたくさん集まるよう内容を考えようと話し合ったことが記されている。

こうして、前月の例会報告、当月の例会案内、会費納入状況、会員の近況報告という形式がその後の会報の内容の基本となり、現在に至るまで引き継がれているのである。

毎月の例会、会報発行と郵送、準備を担う幹事会という組織的前進が、センター職員の援助を受けながら、開始された。

〈例 会〉

例会は、しだいにセンターでの昼食会と話合いに移行していった。鍋物や散らし寿司などを参加者と一緒に作って、食べ、病気、仕事、職場のことなどを中心に話合い、ひとときを共有したのであった。そこには「仲間がいることの開放感と、いつでも彼らが味方であるという安心感」（No.8, 1974. 2.）があった。

1975年には、働く人が増えてきて日曜は休みたいという声が多くなり、例会が土曜日の夕方に変更となっている。センターでの例会が定着し、たまに唄も出たり、外出許可をもらって参加する入院中の会員もあるなど参加者もふた桁となっている。再発の苦しみや辛さ、死、薬や精神科医など病気に関わること、人生観、様々な意見の存在、見聞を広めることなど生き方に関わること、「正社員になった」、「訓練校に入校した」、低賃金、職場での奮闘など仕事に関わること、そして、1人暮らしや老いた両親、家庭でのことなど生活に関わる話題もひろがり、それまでの就労＝社会復帰中心の話題の枠が越えられだしている。

会員数も、センター社会復帰学級の卒業生が増えるに従い、1976年35名、1980年50名となっている。また、会報発行5周年を記念して1～40号の合本を発行している。

この頃、ススキノでおこなわれた忘年会は飲みや唄えの楽しい雰囲気となり、センターでの例会でも、皆で料理を作り、会場作りをし、ビールが飲まれ、遠い北見から1泊で参加する会員もあるなど、常時20人以上の参加者となっている。また、土曜日には参加出来ない会員のために、日曜日、日昼の花見をするなど、ひとりでも多くが参加できるよう配慮されている。さらに、1974年には、働いてためたお金での1泊旅行も開始され、現在も続けられている。

〈会 報〉

こうした展開には、会報の果たした役割は大きかった。「はじめは……文章を……満足に」書け

ず、「センターにずいぶんと助けてもらい」、「原紙に自分たちで字を書」(No.38, 1976. 8.), くなかで会報の発行を継続していった。

例会と参加者たちの様子を飾ることなく描いた内容に加え、しだいに投稿原稿が増え、例会に参加できない人や遠くに住む人、そして入院先から、それぞれの辛い努力や赤裸々な思いが会報に掲載され、それを読んだ人がまた書き送るという風になっていった。

仕事に関わることで、「長靴工場に努めて3カ月……やっと1人前にハサミがつかえるようになった。」(No.5, 1973. 11.), 「1年たった。1日も休まず……よく病気にならなかったものだと自分ながら感心。……本採用に……身分が保障されたことはうれしい」(No.9, 1974. 3.), 「初めは不安で泣きました。……鉄で物を組み立て……溶接し……色を塗り仕上げる……足のケガや手のケガ。」(No.26, 1975. 8.), 「訓練生として働いて得た収入で……一応社会的な衣服がそろいました」(No.41, 1976. 11.), などがその例。

暮らし向きについては、「私の生活白書—12月の給料50720円……家に食費として15000円、おやつ代6000円、定額貯金に20000円、帽子などの買物に4500円、残りは小遣い」(No.19, 1975. 1.)と披露したり、「高校3年生として楽しい毎日」(No.48, 1977. 6.), 「(山口百恵オンステージ)……1時間半の楽しい一時をすごし」(No.49, 1977. 7.) など掲載されている。

そして、近況報告の大部分を病気と障害を抱えた人生に関する投稿が占めていく。「精神病を患ったことのある人の苦しみ悩みに世の中は実に冷たい」(No.16, 1974. 10.)という思い、仕事中に「空笑いがでて……同僚から何故と問われた」(No.17, 1974. 11.)という悩み、「16年間闘病生活を送っている私の名は余りにもしられすぎ」(No.39, 1976. 9.)というハンディキャップ、発病・入院・就職・入院・センターの学級・すみれ会という「私の歩み」(No.42, 1976. 12.) など、これまで他人に話得なかったことや気持ちが、素直に表現されている。

あわせて、こうした精神障害者の現状を少しでも変えていこうという意見も載せられている。神奈川県に転居した会員の手紙を読んで、「なおっても行くところのない人、他府県ではそういう人のめんどろを見てくれてそこから通うようになっていく。北海道にも必要」(No.18, 1974. 12.)とか、「一生病気と縁がきれないとしても人格をもった人間として尊重され幸せな一生をおくるために努力したい」(No.28, 1975. 10.), 「閉鎖病棟にいる。……自分達はふつうの人と変わらない生活をしたい」(No.46, 1977. 4.), 「ふつうの人は私たちの大変さを理解し援助すべき」(No.52, 1977. 10.), 「治療効果のある療養生活を続けられる病院……を望みます」(No.72, 1979. 6.)と。

〈交流と運動〉

1970～1974年までは、センターの社会復帰学級主催のクリスマスパーティに参加する程度であったが、1975年に入り、横式氏が居住する江別市にすみれ会のようなものを造ろうと自ら所属する新日本婦人の会の会合で話をだし、江別市立病院の精神科ソーシャルワーカーを紹介され、またそのついで患者も集まり会合を持つに至っている。

さらに、1977～1978年、新婦人の会で江別市議会に「精神障害者の医療費無料化と保健所に社会復帰訓練所を」の請願を行い、江別市立病院家族会が市長交渉を行っている。結果的に、請願が通り道議会に意見書提出となり、社会保険と国民健康保険の患者負担分の差額がなくなっている。この体験が後の様々な対外的運動にはずみをつけていくことになった。

その間に、精神障害者の組織である浦河のどんぐり会との交流が北家連を通じて開始され

(1976)、道外からは埼玉県の手精神障害者の社会復帰運動体やどかりの里の人が来札し、全国的な精神障害者の社会復帰運動の現状を詳しく知る(1977)。また、北家連から金銭的援助を受けるようになる(1977)。さらに、会報の合本の送付により、全障研北海道支部、車いすアカシア会、難病連、多発性硬化症友の会、札幌市市会議員、留萌保健所、砂川保健所などとのつながりができていく(1978~1979)。

1979年には再び江別市議会に陳情。市の建設予定の福祉センターに精神障害者の社会復帰訓練施設ができることとなり、1982年、あすか共同作業所の実現となる。

1980年には、苦小牧の回復者クラブ和交会と交流が始まり、横式氏は自費で第26回日本母親大会に参加し精神障害者のことを同大会史上初めて訴えている。同年、すみれ会10周年の記事が北海道新聞や赤旗に掲載され、それを読んだ人や団体との交流が開始され、会員の入会にもつながっている。

さらに、注目すべきことは、この時期、1会員の父の死後の生活を心配した横式氏により、年金の知識を取入れその手続きを積極的に推進していく姿勢と行動を獲得していつている。

〈直面した困難——会のあり方をめぐり〉

しかしながら、この7年間は決して平坦な期間ではなかった。1976年頃、「職をなくした、症状が悪くなり入院」したという会員が続き、援助者側のセンター職員から、「入院した者や仕事のないものがすみれ会にいるのはもっての外」という議論が出始め、来辛くなる会員もではじめるなどして、回復者クラブあるいは患者会をどう見るかという点をめぐり、会のあり方について話し合われた。「職を持ち世の中に参加している者にかぎる」というセンター側職員の意見に対し、会員たちからは「とにかくみんな仲間なんだ、この病気は今直って働いていてもいつ再発するかわからない危機を持っているが、そんなことは職員達にはわからないだろう」との声がでて、結局、「1度会に入った者は、再入院しようが本人がやめると云わない限りすみれ会の会員ではなかろうか」ということで、入院者にも職のない者にも“すみれ会便り”を続けて送る”ことになったのである⁽³³⁾。

こうして、すみれ会が会員本位の会として、また、就労や地域生活のみを強調せず、むしろそれらが不可能であってもいいのだという価値観をもち、「仲間」の大切さを確認し、便りを送り続けたこと、そして職員に対しても理解を求め、組織自立への転機となっている。

また、この会の活動の継続自体が偏見^(#5)の中で、病気・障害を抱え、仕事を持つなかなかされたのであった。特に、様々な運動の中心的担い手であった横式氏は過労で2回の入院(1978、1980-1981.)をしており、他の幹事も全員たおれたこともあったりした。その時、「命の綱」である会報の発行は、センター職員安達の力を借りてなされたのであり、安達は彼らの要請に答えたのであった。

3 自立への足がための時期(—1981)

この時期は1年間のみであるが、これまでの10年間の歩みが一気に爆発した感があり、社会的には国際障害者年と重なっている。

会員数は、以下のように急激な増加を見せだし、会員が会員を紹介し増えていったのである。その大半はセンター社会復帰学級の卒業生以外の人たちであった。

1977	1980	1981	1982	1983	1984	1985 年
44	50	65	100	136	170	200 人

〈マスコミとの関わり〉

1980 年 11 月 7 日、北海道新聞はシリーズ「'81 年国際障害者年に向けて」の第 4 部「取り残された人々——ルポ精神障害」の中で「すみれ会の軌跡」を掲載した。これはマスコミが広範な北海道の住民の中に、精神障害者の会とその活動があることを初めて報道したものである。赤旗もその北海道版のスペースに、「社会復帰励まし 10 年」という記事を同年 9 月 13 日付掲載した。1981 年 9 月には北海道のテレビ局 STV が「サンデー九」という障害者問題の番組の中ですみれ会を取り上げ、横式氏が出演している。これは、自ら精神障害者を名のり素顔を出して、電波で精神障害者問題を広く道民に知らせた最初であった。さらに、同氏は、北海道新聞に精神障害者問題に関して 1 年間、連載している^{(38)(#6)}。

これらのマスメディアを通じ、精神障害者や家族から事務局（横式氏宅）に電話や手紙などによる問い合わせが殺到、直接訪問もあるなど、精神障害者問題が北海道の人々の中に知られ始めていくことになった。「局地的な領域をこえたレベルでの相互交流、またその社会的価値づけ」⁽³⁹⁾の主体に、会が到達したのである。

〈年 金〉

古くからの会員の足が例会から遠のく（No.81, 1980. 3.）一方、会員が新しい友人を誘って来るケースがふえ毎回新しい会員が増えてきた頃、年金のことが例会と会報上で話題となり、生活の経済的保障という課題への取り組みが始まっている。障害福祉年金・厚生年金の障害年金・生活保護の障害加算などを知り、さらに具体的手続きを調べ上げ、実際の行動へと進んでいったのであった。「市役所の係や病院のケースワーカーでも知らない方々も多く」（No.83, 1980. 5.）、横式氏たちは希望者に同伴して一緒に手続きを取る行動もとっている。

その間、全国生活と権利を守る会北海道本部（道生連）に相談する機会が増え、同時に、他の障害者団体との交流が始まる。その一環で、北海道身体障害者団体定期刊行物協会（HSK）^(#7)へ加入し、会報が第 3 種郵便物認可を受け、郵送料が安くなり、会費値上げをしなくてすんでいる。

〈運動的側面〉

1981 年 4 月、障害者の生活と権利を守る北海道連絡会議（障道協）が国際障害者年を機に結成され、すみれ会も加盟している（No.95, 1981. 5.）。これは、すみれ会が身体障害者たちとの運動に合流したことであり、同時に、精神障害者の存在が他の障害者から認知されたことを意味している。

翌月おこなわれた障道協主催の国鉄札幌駅点検活動への参加（No.96, 1981. 6.）、「全面参加と平等」の集会などに積極的に加わり、また、札幌市や北海道に対する交渉にも毎回参加し、特に、政策に精神障害者を対象に入れるようにとの発言を繰り返している。

さらに、「すべての障害児者が社会生活と社会発展への全面参加と平等を実現するための請願」署名を集め、障道協の幹事の団体の一員として、その上部団体である障全協の対政府交渉にも代表を送りだし、精神障害者に関わる「保安処分導入反対・雇用促進法の適用・社会復帰訓練施設

の設置・人権と人格が認められるような福祉政策など」を要望している。入院中でありながら仮退院という形をとって参加する会員もいる(No.99, 1981. 9.) など、こうした行動が、一貫して継続されていく。

〈会則の決定〉

以上の活動の拡大は、大きくなりつつあるすみれ会の内部の再編・成熟と不可分であった。

「何らかの目標をもち、その目標の達成のために調整されている場合」⁽⁴⁰⁾、集団が組織として成立していると言われているが、すみれ会の場合は、重ねて、かつて歴史上存在したことのなかった精神障害者自身の組織という特徴を忘れることはできない。

それらの証左であり、苦闘の歩みを集約し、今後の課題を明らかにした会則は、1981年3月28日の例会の席上で討議され決定されている。全文は以下である。

1. すみれ会は精神病をわずらったことのある人なら誰でも入会できます。
1. すみれ会は会員の親睦を主な活動とします。(毎月1回の例会及びレクリエーションをします)
1. すみれ会は精神病をわずらったことのある人々が人格をもった人間として尊重され幸せな一生を送れるよう努力いたします。
1. すみれ会は他の障害者、障害者団体とも手をむすびはげましあっていきます。
1. すみれ会は会員全員が相互に理解しあうためと社会に私たちのことを理解していただくために『すみれ会便り』を月1回発行します。
1. すみれ会は会長1名と幹事若干名により幹事会を構成いたします。
1. すみれ会は会の運営のために2期にわけ、1期500円、年間1000円の会費をあつめます。

昭和56年3月28日

会の歴史上、正式な会則はこれが初めてであり、活動を自分達で総括し決定したことは、組織の自立性と自主性を示したことであり、まさしく足元を固めた出来事であった。

4 独立の時期(—1983)

〈自立—独立〉

1982年の「目標」には4点が掲載されている。「年金など—権利が実際に保障されるよう助力したい、精神障害者福祉法を国に制定してもらうよう努力したい、北海道の精神障害者回復者クラブの交流、連絡の組織を今年秋につくりたい、お互いに助け合い、はげましあう事を活動の中心にしたい。」(No.103, 1982. 1.)

当時、両親死後の生活問題が切実な話題として浮上してきている。「最近、親が亡くなった、入院したという知らせが……とてもたくさん。親の死後どうやって生活していったらよいか」(No.104, 1982. 2.)。解決の一方法として、精神障害者のケア付き住宅の建設が模索されている。これは、1年ほど前に入院していた横式氏が、身体障害者との交流などを経て精神障害者にも必要だと思い、他の患者さんに願望として話していたことであった。その時、20年も入院している人から、「ボクには入れないだろうが、若いもののためにぜひつくってくれよなあ」(No.92, 1981. 2.)と言われている。行政への交渉にもこのことが強調され、会員の建築士が図面を描くまでに

至っている。

さらに、年金や生活保護に関しての取り組みが一層の広がりを見せ、専門家を招いて学習会を何回も開いたり、また、精神障害者に関わる法律上の欠格条項——自動車・危険物取扱・ボイラーマンの資格免許について調べ関係機関に問い合わせたり、会員の政党支持の自由を表明したりなどの具体的活動が活発であった。

同時に、それらの活動を担う会員が次々と増えていったことがこの時期の重要な特徴である。後の会長をはじめ、新入会員が続出し、会報には新入会員の自己紹介が連続して掲載されている。既に、センターの学級出身者中心の組織構成という特徴は薄れてきており、入院中の人、遠くにすむ人の入会も増えている。1982年、会員100人、会報300部、1983年、会員136人、会報400部と増加している。1982年12月の忘年会会場に一団となって向かう時、会員同士で、「すみれ会もちょっとした力だね」——「そうだよ、すみれ会は大きな力なんだよ」という会話が交わされているが、ここに自分達の組織に対する誇りと自信とが読み取れる。

そして、それまで対外的には横式氏が個軍奮闘していたかのように見えていたが、この頃から複数の人が活動の対外的な場面にも登場してきている。1983年には、複数の会員が札幌市の繁華街の三越デパート前で数回にわたり、「精神障害者の会・すみれ会」と名乗って、精神障害者に福祉法をというチラシを配り署名を集めている。参加した1人は、「むさぼるように読んでくれた市民の方々がどこかで私たちを支えてくださることを信じています」との感想を述べている（No.125, 1983. 11.）

〈北海道精神障害者回復者クラブ連合会〉

1983年10月9日には、北海道の当事者組織の代表が札幌の温泉に1泊して道回連の結成をしている。「人並に……一流ホテルでやりました。55名集まって、14団体、400名加盟です」。結成に向け中心的に働いてきた横式氏自身、「私が1番感動し、励まされたことは、北海道各地、稚内の果てからたった1人、2人で介助者もつかず見も知らぬ定山溪の宿にたどり着いたという事実でした。たくましくなったものだ。すみれ会だけがこの13年の歩みの中で強くなったのではなく、全道各地の精神障害者が強く生きようになったのだと感じ、目の前が開けていくという感慨にひたりました」と述べている（No.125, 1983. 11.）。横式氏は会長、すみれ会は幹事団体として委託されている。

〈対外的交流と運動〉

道外の当事者組織との交流もこの時期さかんに開始され、その幅も広がっていた。東京の「板橋友の会」、「友の会」（菅原ペテロ代表）、北九州の「わらびの会」、大阪の「明星会」、四国の「ごかい」などである。

家族会とのつながりも、北家連大会での当事者の立場からの提言者としての出席、全家連大会での発言など、参加の度を強めている。

障道協——障全協を通じての対自治体・政府交渉には引続き参加し、日本母親大会では「私たちの運動は、おちこぼれの民主主義の運動」と発言し、札幌弁護士会主催の集会では保安処分反対の講演をし、北海道の障害者の日記念事業では「自立とはなにか」のシンポジストとなるなど活発な運動を展開している。

このころ、「人並の生活をおくりたい」という横式氏の口癖は実質上、すみれ会の実践的スロー

ガンとして機能していたのであった。

〈事務所開設〉

以上の物質的保障となりえたことが、自分達の事務所をもったことである。直接のきっかけは、1983年3月に、センターの職員の1/3が交代することとなったことであり⁽³⁴⁾、「センターの軒下を離れ」「全生連の1室を……借り」⁽³³⁾た。

しかし、内的必然性は既に充分であった。第1に、日常的な活動遂行のための拠点として、第2に、多様な多くの会員が気兼ねなく集まれる場として、第3に、自分たちが自分たちのために自由に使用できる場としての必要性などが眼前にあったのである。「お金もなく冒険だったが、すみれ会が援助者の意見のもとにはなく、自分達の意志で会を運営していこうという第一歩がここにはじまった」⁽³³⁾。ただし、それは天からふってわいたものではなく、1年以上も前から、横式氏が障道協の事務を週1回手伝うと同時に精神障害者の相談業務を引継ぎ受けており、障道協が引越したためにその部屋が空いたのと重なったことによる。

IV 展開期 (1984—1994)

展開期は、2つに大きく区分しうる。

1 すみれ共同作業所の建設 (1984—1987)

〈事務所の意義〉

「私(横式氏)がたおれても会はずぶれなくなったと思う」(No.130, 1984. 4.)。札幌市中央区の中島公園の近くの1室で、週3日、活動日がもたれ、そこに集まり、打ち解けあい、病気の悩みや生活の困難などを言い合い、相談しあえる場となり、また、ごろごろしていてもだれからもとがめられず、好きなだけタバコを吸うという、病院や家庭でできえなかったことが出来る場を持ったことの意義は大きい。交代で昼食を作り、冬にはストーブが暖かく、夏は近くの公園でのんびりできる。働けとかなまけるなどか言って押えつける人もいない。これまで以上にお金がかかるが、会費納入や寄付金の呼びかけをし、そのつどしのいでいくという粘り強い努力がなされていく。「会報を通しての交流とあわせ、私たちにはおたがいの心を打ち明け、なんでも話し合える場がぜひ必要だった」「手を取りあい、励ましあって1日も早く社会復帰を」⁽⁴¹⁾という喜びがあふれていた^(#8)。その後、1985年、北区のアカシア会館の1室に引越し、1987年、1戸建ての家を借り、1989年、現在地に自前の事務所を持つに至っている。

〈サークル活動〉

1984年、英語サークルが高校の先生を講師にして、うたごえサークルが会員のギターにあわせて公園で、詩吟サークルも会員を講師にして、それぞれ月に2回ずつで始まった。1985年には北区の体育館を会場にしてスポーツサークルが始まり、1986年には、事務所で、専門家を講師にして歴史サークルが始まり、1987年には、同じく哲学サークルが始まっている。

〈すみれ会の1日〉

このころの事務所風景は、次の文によく表されている。「私(横式氏)は毎日張り切って9時半までに……皆は10時半頃。集まるとワイワイガヤガヤ、……ラジオかけたり……。月金金の10時

から4時まで、月に1度だけ夜の8時迄あいている。」「昼食は50円で、月曜はカレーライス、木曜はスープ、金曜はうどんが多い。それぞれの曜日の担当は決まっている。会から食事用に1カ月1万円の補助がある。」「月曜はスポーツサークル、精神衛生法の学習会、お華サークル、木曜は歌声サークル、歌集は……3冊めを首を長くしている、金曜は紙細工、和紙を染めて、でんでん太鼓やペン立て、しおりなど……。1日利用者は15～20人くらい。」「木曜には、……役員会議が開かれる。月に1度は決定機関である幹事会が開かれる。例会は月に1度、精神衛生センターで、飲んで食べてうたって1000円。もちろん手作り。例会が最高決議機関。」「いつもお金がなくてピーピー、しかし、ふしぎと赤字をだしたことはない。会長（2代目——堀田氏）はいつも忙しく、すみれ会の休みの日は1日中ねむっている。私も同様。」「すみれ会は何から何まで精神障害者自身でやっている。この便りをはじめ各種のサークルの講師もしかり。」「1カ月8万円くらいないとやっていけない。金ぐりには胃が痛む。トランプがはやっている。マージャンはやらない。会が終わってからやっているようだ。みんな精神障害者だという安心感……。毎日あわただしく過ぎていく」（No.161, 1986. 11.）

〈会長の交代〉

1983年11月、横式会長が道回連会長も兼ねる事となったため役員を一部補充し、会長代理K氏を置いているが、彼は、精神障害者にもできる印刷の仕事と指導のほうに移っている。その後、会長が過労で入院し、直後の1984年11月の会報から編集人が堀田美千子氏に交代、1985年4月、正式に会長となる。また、幹事も新しい人たちが担うようになり、横式氏と安達が顧問となっている。当時、安達は次のように述べている。「1月として平坦な月はなかったように思う。200名の会員、会報を500部印刷するという。たいしたものである。……7転び8起きなんてものでない。13転び14起き、いやもっとそれ以上かも知れない。とにかくちょっとやそつとではもうすみれ会はつぶれないであろう」（No.150, 1985. 12.）と。

〈2代目会長〉

堀田美千子氏は1981年5月に、外出・外泊が自由なためもあった入院中に入会している。「会の10年の歩みに……私もともに一步をふみだしたいと心重ねるもの……それは私が皆と同じように人間だから」（No.96, 1981. 6.）。「病院暮らしも3年になる。精神障害者ってものがどんなにみじめなものか……しんぎんなめても、みじめさに地べたにはいずりまわっても、生きてゆかなきゃならないのなら、自らの良心に恥じることのない人生を歩もう。……この病気になって一度も泣いたことのない人なんていないだろうな。だからお互い励ましあって強く生きていこうよ」（No.101, 1981. 11.）。「私はいつもじゃま者で迷惑者で、必要のないきちがいであった」（No.106, 1982. 4.）。その後、制限の多い病棟に移されているが、「すみれ会の皆や仲間にあいたい……。健康を……人権の尊重される社会を……自由に活動できる日々を……生き生きと生きることを夢みる。」（No.107, 1982. 5.）

希望していた新設の病院に移って9カ月経ったころ、幹事に選ばれ、例会の司会をよくしている。「私は無神論者だけど、この頃、三浦先生（主治医）の顔が神様にみえることがある。病気になって15年……自分を病気だとは認めずにまわりを手こずらせた1人である。」（No.128, 1984. 2.）。

会長として多彩な精一杯の仕事を約5年間続け、体調をくずして活動の一線から身を引き、現

在は、障道協で仕事をしている。今も列記とした会員である。彼女の特色として、「みんな、あったまりにおいでー、ストーブにあたりにおいでー」などの会員への感性的な呼掛けを強め、恋愛の話題の先頭になり、詩や文章を通じた精神障害者の人間的尊厳や基本的人権の訴えの主張と伝播の努力が、全身からほとばしっていたことが上げられる。

〈恋愛・結婚〉

「気違いと言われながらも聞き流し歩む道にて我泣きぬれる」(No.123, 1983. 9.)という1会員の歌に象徴される人生を歩んできた人たちにとって、恋愛や結婚は「タブー視され」(No.143, 1985. 5.), あきらめざるをえない人も多く、また離婚した人も少なくない。さらに収入のない人や年金や生活保護で暮らしている人たちにとって、それらは言い出しにくい状況に置かれてもいた。しかしながら多くの会員同士のなかに大人の男と女がいて、しかも病気のことを理解しあえるのであれば、恋愛も結婚も不思議なことではない。

1983年には3組が結婚している。その後も引続き、1988年には5組の結婚を会で祝っている。当時、事務所でもその話題で議論が湧き、会報でも真剣な誌上討論が繰り広げられている。「節実な問題である……私も精神障害者同士で結婚したばかり」(No.143, 1985. 5.), 「不安がともなう……再発……入院・退院……職……自立できない」(No.144, 1985. 6.), 「いかなる差別もなく平和で豊かな生活の砦を築くため語り合うこと、それこそが恋愛……結婚だと思う」(No.146, 1985. 8.), 「35才の精神分裂病のひとりの女のさみしさ」(No.148, 1985. 10.), 「1人の女の、あるいは男の能力を伸ばし、生き、働き、活動し、愛し、生活していくことを保障し、助け合い、そしてそれを愛すること」(No.149, 1985. 11.) など、意見が交換された。

そして、大切なことは、道生連の援助もあって、生活保護を受給しながら結婚することがなんら恥ずかしい事ではないという雰囲気が会内にみなぎっていき、結婚を実現した人達が少なからずいるということである^(#9)。

〈共同作業所の開設〉

1986年末、毎日集まる会員の「仕事をしたい」という思いから、会事務所内に「すみれ共同作業所」が出来た。「仕事はウエス作り。シーツを切って60センチ四方の布を作る」「月から金までの5日間……。賃金は時間給。参加した時間数によって利益が配分」(No.163, 1987. 1.)。この共同作業所の責任者は会員の中から選ばれ、全責任は会長がもった。こうして全国的にもまれな精神障害者自身の手による共同作業所が開始された。その直後に事務所が1戸建て借家に引っ越してからは2階を作業場として、1階を事務所と憩いの場とし軌道に乗っていく。

半年後、1人の参加者はこう述べている。「最近、調子が戻ってきたようだ。作業を通して何かばく自身に作用しているものがあつたのだ……ひとりで内職をやっているのではない」(No.169, 1987. 7.) また、別の人はこういう。「かよっている人は31人、毎日平均15名、指導員は障害者自身……彼らはふつうの企業でも働ける能力をもっている。しかし、無理をいってやってもらっている」、「緊張することなく話ができる。同じ心の病をもつ仲間の友情が生まれる。べつに病気のことをかくす必要はない。企業……心底、心を解きほぐしてくれるところはなかった。……力は回復者クラブや共同作業所の方が、へたな医者よりずっとある。社会復帰ということばがでると、すぐ仕事に目がいきがちであるが、かたくなになった心にいくら仕事を与えても、それは難業苦行でしかない」(No.171, 1987. 9.)。

〈家族会〉

運営が着実に発展し、会則も現行のものとなり(No.166, 1987. 4.), 事業計画書と共同作業所運営要領も討議決定され組織的にも整備され、道回連の中心として、また、全国各地の当事者団体との交流を深め、自治体や政府との交渉にもますます積極的に取り組み、精神医療関係者などの協力を肯定的に受け入れ、マスコミを通じてその到達点を全国に伝達し啓蒙するという段階に至ったすみれ会。

そこに、家族会が誕生した。作業所にあつまり、家族も仲間づくりをしてはどうかと話し合い、24名出席者が満場一致で発足を認めた(No.170, 1987. 8.)。後から家族会ができたのであった。家族会をつくってもいいかという申し出があったとき、すみれ会は条件をつけている。条件とは、「出来るだけ口出しをしないで欲しい」ということであった⁽⁴²⁾。これは全国的にもめずらしいケースであり、対家族との関係における、すみれ会の自立性の独自の特徴といえよう。

〈運動・対外的側面〉

この時期のすみれ会は、北海道そして全国に視野を広げ、活動を展開している。1984年4月、参院予算委員会で小笠原貞子議員が、収容・隔離中心で、社会復帰施策の極めて少ない精神障害者対策の現状を批判し、改善を迫っている。質問準備のため何回かすみれ会を訪問していた同議員は、傍聴にきていた横式氏らを議場外で厚生大臣に直接面会する機会を用意した。横式氏らは、「人格をもった人間としてあたたかく見守ってほしい。私たちはなおってすぐには社会に順応できないことが多い……リハビリなど、社会復帰施設やケア付き共同住宅など福祉施策が必要なんです。それらがあれば、私たちは自立できる」と訴えている⁽⁴³⁾。その時、同大臣は精神障害者がきちっと要請したとびっくりしている⁽⁴⁴⁾。そして、その翌日の社会労働委員会で、同大臣は、「あのかたがたなら社会復帰していける。精神病の人々がどんな状態におかれているかはつきり頭に刻み込まれたので前向きにやります」と約束している。その秋、精神障害者向けの予算が1.8倍になったという⁽⁴⁵⁾。このことは、日本の政治の上でも画期的な事件であったと言わざるをえない。

当時の精神医療、とりわけ入院患者の置かれていた状況は、6割強が閉鎖病棟に収容され、10年以上長期入院が半数、強制入院が9割以上などというものであった⁽⁴⁶⁾。そうした実態の象徴的事件であった宇都宮病院事件を契機に、日本の政府と精神医療が国連人権小委員会から批判され、アメリカと日本の人権団体も精神病院での日常的虐待を訴えている⁽⁴⁷⁾。

北海道でも、このころ精神病歴を有する男性による殺人事件⁽⁴⁸⁾や私立精神病院でのすし詰め入院⁽⁴⁹⁾があり、精神障害者に対する医療と社会復帰体制の立ち遅れが大きな問題として浮上してきている。1985年、第18回全国精神障害者家族会連合会の全国大会が札幌で開催され、あらためて精神障害者福祉法の制定が強調された⁽⁵⁰⁾。こうしたなかで精神衛生法が改訂され、1987年9月、現行の精神保健法(人権尊重、社会復帰の促進、医療の向上を重視)が制定され、翌年4月、施行されている。

すみれ会はこの間、1984年、札幌市に対し、小規模授産施設への助成の陳情をし、市議会で主旨説明を行っている。この時は通らなかったが、1987年、再度の陳情をおこない、1988年、市議会厚生委員会で満場一致の採択を受け、1988年度より札幌市が北海道ではじめて共同作業所に補助金制度を制定し、支給を開始している⁽⁵¹⁾。すみれ共同作業所も札幌市から助成を受けている。また、長年関わってきている精神障害者福祉法制定の請願が、1986年参議院の本会議で採択されている(No.157, 1986. 7.)。

また、家族会との関係においては、1984年、全家連会長が事務所に来訪し、同年の北家連大会では患者会として初めて祝辞を述べ、1985年の全家連大会では当事者組織として初めて表彰を受けている。その後も、各大会に当事者の立場から参加して発言したり、提言したりしており、その姿を目の当たりにした母親たちから、「話したいと思ったなど」と言われている(No.162, 1986, 12.)

さらに、道回連の総会を毎年準備運営し、北海道の当事者の連帯を強化しつつ、同時に、1983年から開始されていた全国精神障害者社会復帰活動連絡協議会(全精社連)の大会に合流し、全国の当事者組織との連携を深める中、全国組織の形成の可能性を探っている。

障道協——障全協を通じた運動にも積極的参加を欠かさず、その運動の課題に、精神障害者福祉法の制定を加えるように奮闘している。

それぞれの運動には、もはや複数の会員が手分けして参加することが定着していた。

〈マスコミを通じて〉

精神衛生法の改訂を前にした1987年1月18日、TBSの報道特集「人間らしく生きたい—精神病者の訴え」(全国放送)のなかで、すみれ会は堂々と自分達の姿を示し、現状の改善を主張をした。堀田会長が、自分の経歴——入院の体験、家族との葛藤、非人間的な医療、新しい医師との出会い、会の活動などについて赤裸々に話すなど、会員たちはマスメディアを通じて全国の人々に訴えた。「私たちの主張を真正面から取り上げてくれた」とある会員は言っている(No.164, 1987, 2.)。

取材側の堂本暁子は「あまりにも知らなかったというのが一般の反響」「もっと続けて下さいというのが病院の中の人や退院した人たちの訴え」と言い(同上)、また、このことは、「16—17年前、神奈川のあすなろ会の小坂さんたちがNHKテレビで発言していらいのこと……。あのテレビ、厚生省の精神保健課の職員がほとんどみていた」(全家連事務局長、滝沢武久)という意義をもっていた(No.165, 1987, 3.)。

2 すみれ第2共同作業所まで(1988—1994)

〈会長の交代——現会長へ〉

1988年1月、会報175号の巻頭に顧問の安達は次のように書いている。「すみれ会の皆……よくここまできたな。一生懸命しあわせになろうとしてるな。……本当に誰もが不可能と感じていることを可能なものとしてきましたね。そのひとつは『すみれ会便り』が1回の休みもなく現在まで続いていることです」。

だが、その直後の1988年5月の会報は発行されなかった。前年に一時休養宣言をしながらすぐ活動を続けてきていた堀田会長が「不調のため」(No.179, 1988, 6.)編集と原稿の清書が不可能になったためであった。ここで発行体制の不備などを言うのはたやすいが、それは無責任な指摘である。それほど懸命にやっていたのだということが大切であり、会員たちは彼女への優しい配慮と感謝の気持ちを忘れていない。会報には連続して、お見舞いの言葉や思い出が掲載されている(No.182, No.183号, No.184, 1988, 9—11.)。その後を受け代行したのが副会長の大井暢之氏であり、翌1989年4月から正式に会長となり現在に至っている。

〈自前の事務所〉

札幌市からの共同作業所への助成が実施された翌1989年春、「市の土地を借りて……作業所を、あずましい所に、あずましく建設したいという願い」(No.189, 1989. 4.)が、市議員生駒の働きと市の担当者により、中央区にある土地100坪(道路3本に囲まれた三角地)を借りる形で実現している。すみれ会は、事務所・共同作業所・道回連事務所の3つの機能をもつ50坪のプレハブの建設計画をたて、資金700万円を見込み、募金を訴えている。

当時、大井会長は次のように訴えている。「今の……1軒家を借りる(時)、皆、自分達だけで管理するのは無理ではないかと不安気でした。火の始末、水道を凍らすのではなどなど。でも3年間無事……私たちだけでやれたのです。しかしながら……もう並の1軒家では収まらなくなってしまった……。そんな時、……土地を貸してくれるという話……うれしかったです。自分達の城をもてる。もう“やどかり”ではない。……様々な方達が、私達の活動を理解……応援してくれたおかげ。建設資金……やっと半分集まったところ……これからががんばり所」(No.190, 1989. 5.)

札幌市からの設備資金100万円の補助も含め資金が集まり、8月に建物が完成し、120名で落成式を行っている。自前の事務所ができたことは、「自由と権利を手中にした」(安達)ことであり、すみれ会の存続と前進の物質的保障となったのである。

〈総会——組織的整備〉

その直前の5月、第1回すみれ会総会が、発足以来19年目にして初めて行われている。あらためて年1回の総会を持つようにし、例会から会議という役目は外された。例会——幹事会——役員会議という体制から、総会——幹事会——役員会議という体制に変更されている(No.189, 1989. 4)。

第1回の総会には、23名が参加し、精神保健センター講堂で行われている。議題は原案通り承認され、総会後はジンギスカンとカラオケで懇親会が行われている。ここで、会議の定足数の規定の無いことについてふれる。第1回総会に参加したのは会員数全体の約1割である。普通の会議では、未成立となるところであるが、すみれ会では成立となる。なぜか。第1に、参加する事自体が様々な理由から困難な人が圧倒的に多いということ、第2に、普段から会報をはじめ、例会や共同作業などを通じて話し合いがなされ、互いの理解が進行していること、第3に、指導的な人たちに対する言葉の正しい意味での権威がゆるぎなく、形式的な手続きに固執する必要のないことなどが考えられる。それは、経営的効率や能力優位の支配的思想とは一線を画し、「私どもの活動はものごとの『民主化』という点において現代の日本社会に汲み取っていただくべき基本の姿」(No.195, 1989. 10.)という会員の声にもあるように、組織のあらたな人間的あり方を切り開きつつあるのかも知れない。

〈地域社会との関係づくり〉

「まわりの住民の反対をおそれて町内会に入らず、ひそかに活動してきた」(No.181, 1988. 8.)段階を経て、1戸建ての事務所に越した1年後、向いの団地公園でバザーを初めて開いている。町内会長に挨拶にいき、好意的に会場(雨天時は団地集会所)を借りることが出来るなど地域の人とのフェースツーフェースの関係が始まっている(No.183, 1988. 10.)。現在地に移ってから事務所を会場として、バザーが続けられている。「地域の人達と交流したい……私達の活動を理解していただくこと……財政の一助とさせていただきたいという目的」(No.204, 1990. 7.)で

おこなわれ、「降りしきる雨の中……あまり宣伝がよくなかったけれども近所の人がたくさん」(No.208, 1990. 11.) きている。

また、向いの競馬場のグラウンドを借りることができ、週1回ソフトボールをしている(No.203, 1990. 6.)。今後は、この近所の人達とどのように交流を深めて行くかということがひとつの課題となっている^(#10)。

〈20周年〉

自前の事務所で初めての忘年会を家族会と共催し、また、第2回総会も開き、名実ともに「多くの精神障害者の集える場所」(No.198, 1990. 1.)となってきた翌年、すみれ会の20周年行事——記念文集⁽⁵²⁾の発行と記念講演・祝賀会のふたつが行われた。

文集は70頁の小冊子で、すみれ会と私、闘病記、社会復帰について、人間関係について、もしも病気にならなかつたら、その他の各テーマで24人の会員が書いている。「様々な体験、夢がつまって」る文集、「社会で偏見や差別にあいながらも我々だって『どっこい俺らも生きている』……」。260名の会員ひとりひとりが、したたかに地域の中で生活しているということは、どんな先進的運動より、偏見・差別を無くする1番の近道だ」という編集後記の言葉に、20年間の思いは重い。また、「多くの人々の支えなくして……存在し得なかった」ということへの礼の言葉も厚い。

講演会では、創立以来の協働者として関わってきた安達が講演し、感激に泣く一幕もあるなど、しみじみと心温まる思い出話をし、祝賀会では77名もの人が集まり祝ったのであった。準備を会員とともに担った会長の大井は、終了後、「やっと20年、まだまだ20年、精神障害者への風当たりが強ければ強いほどファイトがわいてきます。……あと20年でも30年でも、精神障害者が普通に暮らせる社会となるまで手を携えてがんばりましょう」(No.207, 1990. 10.)と感慨を述べている。

そして、北大医学部教授(精神医学)山下格は次のように述べている。「医療と福祉のはざまで、病人自身が自ら癒すこと、将来どんなに医療や福祉が発達しても、病人しか癒せないことがたくさんある……すみれ会はこの大切なことを、たくさんの困難と誤解をのりこえて、見事にやりとげてきた……これから先も、他には代え難い貴重な集まりとして、ますます発展されることを」と⁽⁵²⁾。

〈好きですサッポロ大会——全精連結成〉

1991年6月15日、16日、第9回全国精神障害者社会復帰活動連絡協議会大会が札幌で道回連が中心となって開催され、全国から640名の参加があった。「援助の手を借りたとはいえ、メインに動いたのは回復者、分科会の司会も北海道内の回復者。これを機に回復者が表面にでること、自信をつけることができた大会でありました」(No.216, 1991. 7.)。1990年4月に実行委員会が始まり、10回の会議を含め、準備され、当日の運営がなされている。すみれ会もその中心にあつて「入院」覚悟の意気込みで(同上)働いた。「大会宣言案を練り、当日の参加者の移動……、宿……、などなど。前日までバタバタし、気がついてみると当日が始まっていて、終わってしまった」(同上)。

そして重要なことは、この大会が全国の精神障害者の連合会の結成への重要なステップとなったことである⁽⁵³⁾。既に、1990年10月の第8回埼玉大会で患者自身の全国組織をつくらうとの提案があり、その後、全国組織をつくることの合意とそのための準備委員会がつくられ、札幌大会の

時に全国組織の準備会と全精社連が別組織であることが確認されている。その後、何でも論議を深め、1993年4月、全国精神障害者団体連合会が結成されている⁽⁵⁴⁾。これは、日本の歴史上初めての精神障害者である当事者自身による全国組織であり、画期的な出来事であった⁽⁵⁵⁾。結成のきっかけのひとつに、精神衛生法改訂の際、全精社連が精神障害者自身の声を聞いて欲しいと国にはたらきかけた際、当事者の全国組織がないという理由で断わられた体験があった⁽⁵⁶⁾。結成の半年後、全精連は国に対し、48項目にわたる要望書を提出説明している⁽⁵⁷⁾。

現在、すみれ会大井会長は、全精連の幹事をつとめている。

〈第2共同作業所の建設〉

1993年3月30日、すみれ第2共同作業所建設委員会は、「建設のための募金のお願い」を出している。「(現在の)作業場……大変手狭で混雑の日々で、十分な作業が出来ず困窮。北海道には精神障害者が7万人おり、2万2千人が入院。他は在宅で家でゴロゴロ……収入もなく肩身の狭い思いをして親の世話になっています。その人達が一步外へ出ることでも病気が治るためには、必要なこと……現在、精神障害者の共同作業所は札幌市内に10カ所しかなく、すみれ共同作業所にも通う人はどんどん増え、精神障害者の社会復帰に多大な貢献をしています。」と。合計1000万円の建設資金は、すみれ会に通う人1人あたり10回払い計1万円を中心に、家族・支援者のネットをたどり、1年間で達成し、1994年3月、プレハブの第2作業所が完成している。

〈すみれ会の願い〉

会を訪れる人向けに用意されている、「すみれ会ってなあんだ？」という文書には、大井会長名で、会の願いが簡潔に描かれている。

「私達は特別幸せになろうと思っていません。人並の生活を送りたいのです。病(やまい)そのものの苦しさもありますが、精神病院に入院したことがあるということで偏見の目でみられたり、仕事につけなかったり、で、まだまだ社会的な不利益を受けています。それでも社会の中で生きていくんです。地域の人達と溶けこんで生活したいというのが私達の願いです」と。

V 総 括

小説『髪の花』(1971)は、1960年代後半の関東の1精神病院を舞台に入院患者の置かれていた状況を、社会的処遇のあり方も含めて描いた歴史的文献であるが、内容によれば、やっと病院内リハビリテーションが始まった頃であり、患者の人権自体が社会的問題になっていなかった時代であった。また、「社会復帰」といえば即ち就労による自立という固定観念が強固な時代であった⁽⁵⁸⁾。そうした時期にすみれ会が、日本の精神衛生行政の中でも先駆的な道精神衛生センターのディケア卒業生に対するアフターケアの取り組みの中で発足している。以下に、既に記述してきたすみれ会の生成と展開の軌跡を、他と比較するなどをして総括としたい。

1 全国の当事者組織の中のすみれ会

精神障害者の当事者組織に関する系統的研究は、手がつけられ始めたばかりの段階にある。その中でも、全国的調査に基づいた三田らの保健社会学の立場による研究(1991)は貴重な業績である⁽⁵⁹⁾。ここでは、それを手がかりにして、すみれ会の特徴をみることにする。なお、1)～6)は全国143グループを対象とした全国配票調査であり、7)～12)は23グループを対象にした事

例調査である。

- 1) 当事者組織の数は全国的にみるなら不均等に存在しており、ゼロの県がいくつもある中で北海道のそれは多い。そのなかですみれ会は、道回連結成を通じるなどによって、他の組織形成と連帯にも効果を及ぼしてきた。
- 2) 全国的にもっとも古い当事者組織の成立は1967年であるが、すみれ会はその3年後発足し、20年以上活動を継続してきている7つのうちのひとつである。
- 3) メンバー構成が当事者のみであり、かつ、代表者が当事者である組織は、2割弱であるが、そのひとつにすみれ会が含まれる。
- 4) 「代表者がいない会」並びに「代表者がいても専門家である会」では、組織としての確立度が低い傾向にあるが、すみれ会は他の「代表者が当事者の会」同様に、組織的確立度は高い。
- 5) 全体的にグループの存立と盛衰に関わる新会員の入会には専門家が大きな役割を果たしている。すみれ会の場合、初期の段階は専門家のルートが大きかったが、組織自立の前後からは当事者のルートが大きかった。
- 6) 活動状況では、月に1ないし数回の例会を持つものが多い中、「当事者が代表者」のグループでは例会以外でも頻繁に集まっている。すみれ会もそうである。行事的活動は全体に多いが、すみれ会でもそうである。

「代表が当事者」のグループでは、日常集まれる場所があり、会報・機関誌を発行している割合が高いが、すみれ会もそうである。6割が他のグループと交流をもっているおり、会報や機関誌が用いられているが、すみれ会でも同様であり、また直接的な交流も盛んである。

会員相互の援助活動では、相談、入院見舞いが多いが、すみれ会でも同様である。

多くが会費を主な収入源としているなど、常に経済的困難に直面しているが、すみれ会でも同様である。ただし、行政に働きかけるなど困難打開の運動に積極的である。

- 7) 発足のいきさつでは、専門家が現在メンバーに加わっていない17グループのうち7グループが専門家の呼掛けによって発足しているが、すみれ会も含まれ、明らかに、専門家の配慮と当事者の努力が専門家からの独立をもたらししたという軌跡があった。
- 8) 会発展上の転機として専門機関・専門家を離れたというケースがもっとも多いが、すみれ会もあてはまる。ただ、すみれ会の場合は自己決定に基づき⁽⁶⁰⁾、専門家への依存を協力を取り込む自立に転換していったという特徴をもち、困難を自ら引き受けたという側面が強い。
- 9) 会員の日常の支えあいの状況では、当事者のみのグループが最も密であるが、すみれ会もそうである。ただし、プログラムのないという側面と共同作業所や運動などのプログラムの側面とが共存してきたのであり、両方とも大事にしている。また、卓越した当事者リーダーがいてリーダー・会員間の結び付きのみあり会員相互のつながりはないというケースがある場合「専門職化したクライアント」が存在するというが、すみれ会の場合は卓越したリーダーがいて、会員相互のつながりも密であるという特徴がある。
- 10) 専門家の援助について当事者はどう考えているかという点では、「何もしてほしくない」、「いざというときだけ援助して欲しい」ケースが多いが、すみれ会も当てはまるといえる。ただし、すみれ会に関わってきたあるいは現在関わっている専門家は、「いてくれるだけで安心」とすると会員たちが言うように、上下関係ではなく、共に生きているという側面が強いといえる。
- 11) 会の運営上最も大切にしていることでは、「常に自由で、適度に活動し、頑張らない」、「ど

んな症状の当事者も受け入れ、社会からの孤立する人をなくす」ということが全体的特徴である。すみれ会もそうであるが、時に最大限に活動し、頑張るという側面がある。

- 12) 当事者にとっての当事者グループの意義では、「ここから憩えてリラックスできる場」と「自己実現できる場であり、自分も他人のために何かできる場」のふたつがあり、また、ヘルパー・セラピー原則も働いているという。すみれ会でも充分当てはまっている。

さらに、会を越えて、自分達の社会生活を回復していく上で有効な役割をはたしているが、すみれ会の場合、さらに、一個の社会的運動体として確立した組織という特調をもつ。

最後に、「セルフ・ヘルプ・グループが単なる自助でも反専門家志向でもなく、多様な可能性を秘めた存在で」あり、「それぞれの会がオリジナルとして存在する」と三田らはここで指摘しているが、すみれ会の歴史は、そのことを実証してきた歴史であり、現在であると言える。

2. 当事者組織の活動の意義とすみれ会

全家連事務局長として長年家族会運動に関わってきた滝沢は当事者組織の活動の意義を以下の6点にまとめている⁽⁶¹⁾。

- ① 地域社会での活動の継続自体が再入院防止の証し、自立・社会参加そのもの、
- ② 社会と地域の啓発・啓蒙の効果的デモンストレーション、精神障害者への誤解解消、偏見の打破、
- ③ 人間性回復・人権確保の橋頭堡、病気克服、“再生”、孤立・孤独からの開放による人間関係障害の克服、
- ④ 判断・責任能力を有し、病感・病識をもち、権利と義務の主体者としての存在を示す絶好の機会、社会の価値観への挑戦、世間の精神病者観転換への挑戦、
- ⑤ 社会的役割の遂行、社会参加における役割分担としての就労、生産的行為への参加や社会的存在としての生活権の確保、
- ⑥ ピア・カウンセリング・仲間同士の支えあいが、同じ悩みや病をもった者同士の打ち解けた交流が可能な雰囲気の中で有効に機能、……相互支持・連帯・活動、存在の主張。

すみれ会の歴史をみるなら、ここにあげられた項目のすべてが該当していると言わざるをえないが、さらに2点を付け加えたい。

ひとつは、これらの活動全体とその歴史を通じて、自分達の世界を築きあげながら、現代の日本の社会構造の中に精神障害者を対等に組み入れることによって、社会を1歩前進させようとしている運動体であるということ。

もうひとつは、未だに原因不明の精神病と障害を抱えつつ、制度的差別と社会的偏見の唯中で、仲間を作り、維持・拡大し、協力者をふやしつつ、生きているということ自体が、史上かつてなかった大事業であるということ。

こうした点は、他の当事者組織や精神障害者たちと共通する、日本社会に誇りうる本質的特徴であると言わねばならない。

最初から明確な理論の方針があった訳でもなく、精神障害者が「あたりまえの生活をおくること」を実現するためにこそ、すみれ会の活動のひとつひとつがあったし、世間の無知・偏見・差別のただ中で開かずの歴史をこじ開けてきた貴重な積み重ねであり、それを組織的前進に結び付けてきたのである。生成期を思い起こし、横式多美子氏は「みじめな自分を思い、毎日毎日哭い

ていた。枕はいつもびしょびしょだった」と、最近笑顔で筆者に語ってくれた。

会の中にも外にも今後の課題は多数あるが、これまで同様にうまずたゆまずすみれ会は前進するであろう。

結 語

今回のすみれ会小誌の試みは、ひとつの精神障害者当事者組織の会報を中心した資料に基づき、出来る限り引用をすることによって記述したものである。実証的というより、拙なく幼い記録に過ぎない。今後、他の当事者組織や道回連・全精連との連関、他の障害者団体や地域社会との関係、そして何より会員の関わりやリーダー・フォロアーの解明などを含め、一層、正確かつ総合的なすみれ会の歴史をとらえたく考えている。さらに、他の精神障害者当事者組織の記録と資料の整理という課題があるが、こうした地味な作業を進めて行くことは、精神障害者たちとのひとつの協働のあり方の実現としての意義もあり、自らの今後の責務としたい。

謝 辞

精神障害者の現実的生活過程と社会全体との連関の解明という課題が筆者の今後の研究テーマであり、本稿ではその一端に取り組んだ。

こうしたテーマを与えて戴いた今は亡き人たちも含めた「すみれ会」をはじめ精神障害者の方々と、方法論的示唆を与えて戴いた布施鐵治先生に深謝致します。

(註)

- (# 1) ここで精神障害者とは、精神分裂病を中心とした精神病にかかり、精神病院への入院あるいは通院経験のある精神障害・生活障害を有する人たちを意味する。現在約 35 万人が入院し、地域社会では 120 万人以上の人たちが暮らしていると推定されている。
- (# 2) 呉秀三・榎田五郎：「精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的觀察」(1918) (創造印刷復刻版) 138 頁に、「我邦十何万ノ精神病者ハ実ニ此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ、此邦ニ生マレタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云フベシ」とあるが、現在もなおこうした側面が蔽として存すると言わざるをえない。
- (# 3) これらの先駆者たちの事績を調べ、その苦渋に満ちた人間的営為を発掘する仕事はひとつの大きな課題である。他日を期したい。
- (# 4) 総理大臣賞受賞は、精神障害者の立場を明らかにして当事者運動をする者としては、1988 年の神奈川県やまゆり会の小坂功氏に続いて栃木のトスカの神山会長とともに、2 回目である。なお小坂氏は現在全精連の代表である。
- (# 5) このころ横式氏は過労で 2 カ月入院し、退院した直後にある高校の寮の炊事婦として就職した 1 ヶ月足らずのうちに、「精神病だということを隠していたという理由で首にな」っている。就職の際それに関してなんらの質問もなかったのにであった。「涙がポロっとこぼれました。」しかし、すぐに生協に就職し元気に働いています」と会報で報告している (No.61, 1978. 6.)
- (# 6) マスコミに関わるようになってから横式氏はペンネーム「桧文子」を使うようになった。それは兄弟からの要請でもあった。当初、本名で通そうとしたが、社会的偏見の強い現状と兄弟への思いとからそのようにしていたが、現在は本名を使っている。
- (# 7) HSK は、1973 年に設立された。当初 10 年間は身体障害者団体が中心であったが、国連障害者

の10年をきっかけに精神障害者・知的障害者の団体が増えだし、障害者施設・共同作業所・病院なども加入している（「障害者の声、伝え続け20年」, 北海道新聞, 1993. 4. 19.）

(# 8) 筆者は、この当時はじめてすみれ会事務所を訪ねた。横式会長とは面識があったが、他の人たちははじめてであった。しかし、彼・彼女らはなんの気兼ねもない雰囲気をつたえ、昼食を食べさせてもらい、将棋を教えてもらい、生活のことをいろいろ話してくれ、屋根に積もった雪をおろす仕事を一緒にやり汗をかいた。実に人間のない人たちであった。

(# 9) このことが、会員の結婚の実現に裏付けを与えたことが大きかったと、当時を思い起こして会員たちが語るのを筆者は、最近聞いた。

(# 10) 1994年春、すみれ第2共同作業所所長宮岸真澄氏の話しより。

(文 献)

- (1) 宗像恒次：精神医療の社会学，1-25，弘文堂，1984.
- (2) 園田恭一：健康の理論と保健社会学，119-183，東京大学出版会，1993.
- (3) 山田富秋：精神病院のエスノグラフィー，排除と差別のエスノメソドロジー，新曜社，1991.
- (4) 山田富秋：精神医療批判のエスノメソドロジー，エスノメソドロジーの現実，世界思想社，1992.
- (5) 藤澤三佳：スティグマとアイデンティティに関する考察，社会学評論，42(2)，1992.
- (6) ゴッフマン：スティグマの社会学，石黒毅訳，せりか書房，1970.
- (7) ゴッフマン：アサイラム — 施設被収容者の日常世界，石黒毅訳，誠信書房，1984.
- (8) シェフ：狂気の烙印 — 精神病の社会学，誠信書房，1979.
- (9) Crocetti 他：偏見・スティグマ・精神病，加藤正明訳，星和書店，1978.
- (10) 川上武：現代日本病人史 — 病人処遇の変遷，勁草書房，1982.
- (11) 岡上和雄・大島巖・荒井元傳編：日本の精神障害者 — その生活と家族，ミネルヴァ書房，1988.
- (12) 全家連保健福祉研究所編：精神障害者・家族の生活と福祉ニーズ'93 (I)，1993.
- (13) 米山岳廣：長期在院者の問題，文化書房博文社，1992.
- (14) 小林美代子：髪の花，講談社，1971.
- (15) 吉田おさみ：“狂気”からの反撃，新泉社，1980.
- (16) 松本昭夫：精神病棟の20年，新潮社，1981.
- (17) 仲原正宣：息子よ二人で歩こう，素人社，1987.
- (18) 山室あかね：彩流 — 精神分裂病の夫と三十年，同時代社，1988.
- (19) 岡田英明：「精神病患者」を生きる，素人社，1989.
- (20) 林政子：精神病棟・空白の二十年，日本エディターズ，1989.
- (21) 松本真一：閉鎖病棟の憂鬱 — 「分裂病者」私の手記，批評社，1989.
- (22) 全精連準備会・全家連編：こころの病—私たち100人の体験，全家連，1993.
- (23) すみれ会：すみれ会便り，No.1-247，1973. 7.-1994. 2.
- (24) 遠山照彦：目でみる精神医療史，ゆうゆう，No.6-17，萌文社，1989-1992.
- (25) 蜂谷英彦・村田信男編：精神障害者の地域リハビリテーション，医学書院，1989.
- (26) 全家連：月刊ぜんかれん。他.
- (27) 全国精神障害者団体連合会結成大会：大会宣言，1993.
- (28) 浦野シマ：日本精神科看護史，170-171，牧野出版，1982.
- (29) 全国精神障害者団体連合会：月刊ぜんせいれん，No.5，1994. 1.

- (30) 北海道精神障害者回復者クラブ連合会：環（隔月刊），No.64，1993. 11.
- (31) 北海道新聞，1992. 12. 9.
- (32) 人間として(5)，赤旗，1992. 12. 9.
- (33) 安達克己：患者会育成とその意味，精神障害と社会復帰，15(1)，24-28，1985.
- (34) 小野丘美子：精神障害者の当事者組織に関する研究——組織の自立，北海道大学医療技術短期大学部作業療法学卒業研究論文集，No.8，47-64，1994. 3.
- (35) 黒田知篤：患者会の周辺，精神科 MOOK 22，288-296，1988.
- (36) 安達克己：すみれ会の十年を振りかえって，すみれ会便り合本 3-10 周年記念号，161-162，1980. 8.
- (37) 横式多美子：四本のすみれが六万本の花を咲かせるように，ゆうゆう，No.1，14-15，1988.
- (38) 桧文子：思うこと——国際障害者年にあたって，自費出版，1982. 2.
- (39) 布施鐵治・岩城完之・小林甫：社会学方法論——現代における生産・労働・生活分析，251，御茶の水書房，1983.
- (40) 今田高俊・友枝敏雄編著：社会学の基礎，99，有斐閣，1991.
- (41) 待望の事務所オープン，赤旗（北海道版），1983. 2. 27.
- (42) 一人一人の力を大切に——患者会すみれ会のキーワード，ゆうゆう，No.8，6-9，1989.
- (43) 私たちは自立したい，赤旗，1984. 4. 6.
- (44) 小笠原貞子：「福祉の谷間」の人々に春を，赤旗「日曜版」，1987. 3. 1.
- (45) 自立めざす精神障害者たち——北海道の「回復者クラブ連合会」会長の横式多美子さんを訪ねて，赤旗「日曜版」，1984. 10. 21.
- (46) 北海道新聞，1985. 3. 31.
- (47) 北海道新聞，1985. 8. 22.
- (48) 北海道新聞，1985. 9. 6.
- (49) 北海道新聞，1985. 9. 30.
- (50) 第18回全家連全国大会プログラム，1985. 10. 4-5.
- (51) 北海道新聞，1988. 11. 30.
- (52) すみれ会：どっこい俺らも生きている——すみれ会 20 周年記念誌，1990. 10. 10.
- (53) 北海道精神障害者回復者クラブ連合会：好きですザッポロ大会報告集，1993. 4. 10.
- (54) 設立経過，我らの夜明けだ！ トキオ大会——全精連結成大会プログラム，1993. 4. 17.
- (55) 河野仁志：「全国精神障害者団体連合会結成大会」印象記，OT ジャーナル，1993. 9.
- (56) 加藤真規子：精神障害者と社会福祉，NHK 社会福祉セミナー，100-105，1993. 8.
- (57) 全精連：ぜんせいれん，No.4. 1994. 1.
- (58) 河野仁志：長期入院者の実態とその人間像をめぐって——小説『髪の花』を素材として，北海道作業療法，10(1)，51-56，1993. 9.
- (59) 三田優子・大島巖他：精神障害者のセルフ・ヘルプ・グループの実態と意義，社会医学研究，10，91-95，1991.
- (60) 佐藤久夫：障害者福祉論，39-42，誠信書房，1991.
- (61) 滝沢武久：こころの病いと家族のこころ，154-155，中央法規出版，1993.

すみれ会：略年表（1970－1994）

1994年3月現在

年	会の運営・組織	他との交流・啓蒙	運動・マスコミとの関連
1970	発足（道立精神衛生センター社会復帰学級卒業生4人）。		
1971			
1972			
1973	会報1号。会費年500円。幹事5名。会員26人。 例会：レクリエーション的からセンターでの食事と話し合い。	社会復帰学級クリスマスパーティ参加。	
1974	簡単な年間計画と会計報告。 一泊旅行。ススキノで忘年会。		会報に、刑法改訂案批判の文。 会報に、回復者の受け皿の他府県との比較。 横式、江別に患者会を造る動き。
1975	例会：土曜日に変更。会場がセンターに定着。		
1976	例会参加者2桁に落ち着く。会費1000円。会員35名。	浦河どんぐり会と北家連を通じて交流。	
1977	幹事一部交代。例会の料理作りの研究。会員45名。	江別つくし会、旭川青空友の会、やどかりの里と連絡。希望の家チャリティコンサート支援。	横式、江別に市に請願書提出。
1978	会報1－40号の合本発行。	北家連より2万円補助。車イスアカシア会、難病連、留萌保健所、砂川保健所より礼状。	江別市の請願通過。医療費無料化。
1979	忘年会——飲んで歌って。欠格条項話題になる。例会——会話弾む——皆で料理作り、会場作り。	江別市議、札幌市議、多発性硬化症友の会、やどかり通信から礼状。道生連、例会に。	北家連第5回大会で会報合本発売。江別に市に陳情。
1980	地方から例会参加。障害者福祉年金が話題に。会員50名。日曜日、日昼に花見。10周年記念パーティ、文集発行。	苫小牧和交会と連絡。難病連合同レクに参加。26回日本母親大会に参加（横式）	北海道新聞記者、例会に参加。北海道新聞、赤旗、10周年の記事掲載。
1981	会則決定。会報第3種郵便物認可。会員65名。会報220部印刷発送。幹事増員。	障道協加入。他障害者授産施設見学。板橋友の会、北九州わらびの会連絡。	障道協——障全協の対道・政府交渉参加。署名・寄付集め。STV番組に横式出演。北海道新聞に横式連載。
1982	ケア付き住宅話題に。例会参加30名に。障道協の部屋で週1回相談業務。事務所探し。会員100名。	「友の会」、「ごかい」と連絡。障道協幹事会北家連大会で提言、全家連で発言。	対市・道・政府交渉参加。札幌弁護士会主催集会で保安処分反対の講演（横式）。
1983	事務所開設（道生連内）。制度学習会。結婚パーティ3組。道回連絡。勉強会。会員136名。会報400部。	北家連との会談・交流。ソフトボール大会参加。大阪明星会、各地の回復者会と連絡。	障害者の日記念事業のシンポジスト。デパート前で精神障害者福祉法制定の署名行動数回。
1984	電話相談鳴りっぱなし。例会ドンチャン騒ぎ。財政困難。英語・歌声・詩吟サークル開始。会員170名。	全家連会長来所。横浜あすなろ会15周年シンポジストに。参議院議員来所。	札幌市に助成の陳情。国会で厚生大臣に訴え。街頭署名。障全協総会、精神障害者福祉法の運動化を。
1985	会長（横式→堀田）。スポーツサークル開始。恋愛誌上討論。事務所引越（アカシア会館）。会員200名、会報500部。	全家連大会で表賞さる。PSW研修会参加。ひまわり号運動に参加。	道・市共同募金へ要請。対市・道・政府交渉。国家機密法への抗議電報。街頭署名。
1986	歴史サークル開始。精神衛生法学習会。会計ピンチ。すみれ共同作業所開設。月1回、夜8時迄。	全家連大会で発言。ブルーライト横浜大会。共同作業所四者合同忘年会。	精神障害者福祉法請願、参議院通過。対市・道・政府交渉。
1987	事務所引越（一戸建）。会則の全面改訂。事業計画、共同作業所運営要領作成。家族会誕生。会員230名。	北家連大会で提言。全国共同作業所連絡会来所。メーデー参加。TBSテレビ出演。	札幌市議会に共同作業所助成の陳情。対市・道・政府交渉。
1988	共同作業所の車購入資金集め。堀田会長辞任。結婚パーティ5組。バザー開催。[精神保健法施行]	PSW総会に参加。ファンテンハウスセミナー参加。北海道新聞社会福祉基金より中古車1台。	札幌市で助成開始。メーデー参加、チラシ配り。対市・道・政府交渉。
1989	1987年会則一部改訂。第1回総会。会長、大井氏に。札幌市より土地借用。プレハブ事務所建設（自前）。	精神障害者リハビリテーション会議にレポーター参加。やどかりセミナーシンポジスト。千歳家族会講演。	対JR、精神障害者の割引交渉。街頭署名。対市・道・政府交渉。
1990	20周年記念行事。生活相談。会員の誕生会開始。山崎——横式結婚祝賀会。好きですサッポロ大会実行委員会。	全国連合会準備会参加。各保健所、回復者来所相次ぐ。朝日新聞シンポジスト。	札幌精神障害者共同作業所で陳情。対市・道・政府交渉。
1991	第9回全精社連：好きですサッポロ大会開催。五分の魂コンサート。昼食代150円に。ファクシミリ導入。すみれ第2作業所建設計画。精神保健法学習会。横式：総理大臣賞受賞。	神奈川県連来所。厚生省係長来所。病院、保健所スタッフ来所。回復者クラブ多数連絡。保健所、学生の相次ぐ来所。精神保健全国大会参加。各家族会や大会で講演。	札幌市より通所者への交通費助成開始。対市・道・政府交渉。
1992	全会、事務所にて。すみれ第2作業所建設資金集め。好きですサッポロ大会報告集発行。	全国精神障害者団体連合会結成大会参加。世界精神保健連盟1993年会議参加。	札幌市議会視察来所。政府交渉——新長期計画への要望。共作連小規模作業所等成人期障害者対策に関する請願署名。
1994	すみれ第2作業所完成。会員325名。会報770部		